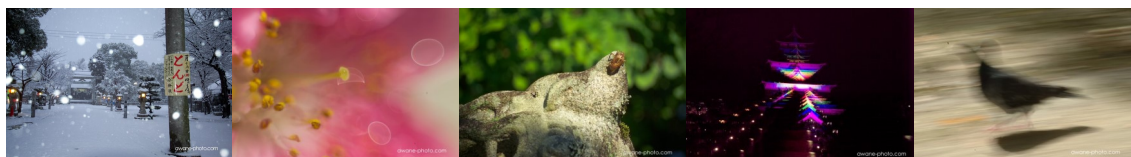


2017年の

撮影日記

写真やカメラに関する日々雑感

awane-photo.com



もくじ

● 1月	...	2	● 7月	...	151
● 2月	...	26	● 8月	...	171
● 3月	...	47	● 9月	...	186
● 4月	...	79	● 10月	...	209
● 5月	...	116	● 11月	...	225
● 6月	...	141	● 12月	...	248

Nikon F-601Mがやってきた ニコン「F三桁シリーズ」コンプリート！

数年前に、携帯電話(スマートフォン)用のゲームにおいて「射幸心をあおる」などの理由で、「コンプガチャ」というシステムが社会的な問題になったことがある。お金を払って「ガチャ」という抽選システムを利用するとなんらかのアイテムが入手でき、用意されているアイテムを全種類そろえると、ゲームを有利に進行できるレアなアイテムがもらえる、というものだ。コンプとは、コンプリート(complete)のことで、「完全な」「完結した」などの意味をもつ。

ここでの「コンプリート」あるいは「コンプ」「フルコンプ」とは、なんらかのシリーズに属するアイテムをすべて集めきることをさす。コンプリートすることは、コレクション的なことを楽しむときの、目標の1つとなりうる。

関係するすべてのアイテムが入手しやすいものであれば、容易にコンプリートできる。しかし、アイテムが高額だった場合や、出現頻度の低いレアなものが含まれている場合には、コンプリートが容易ではなくなる。

それは、カメラのコレクションでも同じことだ。たとえばニコンの「F三桁シリーズ」とよばれるカメラは、発売当時はそれなりに高価な機種も含まれていたものの、いまとなつてはきわめて低価格で取り引きされている。場合によっては、ジャンク品として数10台を一気に入手できることもある。だが、「F三桁シリーズ」のコンプリートは、必ずしも容易ではない。それは、レアアイテムが含まれているためである。そのレアアイテムとは、**Nikon F-601M**である。

Nikon F-601Mは、Nikon F601から「オートフォーカス」と「フラッシュ」を省略したモデルである(図1-44)。Nikon F-601は中古カメラ店でもよく見かけたので、よく売れたもの

と思われる。それに対してNikon F-601Mは、中古カメラ店で見かける機会が少ない。たまに見かけても、ややレアなアイテムと化していたためか、それなりに強気な価格設定がされていた。ともあれ入手しにくい「レアアイテム」と化している。

このたびNikon F-601Mをいただいたことで、ようやく私も、ニコン「F三桁シリーズ」をコンプリートすることができた。



図1-44 ニコン F601M

ニコン「F三桁シリーズ」をコンプリートしたので、この機会に「F三桁シリーズ」をまとめておこう。

● F-301/F-501 AF～電動巻き上げの新シリーズ

「F三桁シリーズ」に含まれる機種は、9機種ある。これは大きく2つのグループに分けることができる。1つは、Nikon F-301とNikon F-501AFの2機種だ(図1-45)。

Nikon F-501AFは、1986年4月に発売された。ニコンからはじめて発売されたオートフォーカス一眼レフカメラはNikon F3AFであったが、Nikon F3AFのオートフォーカス対応レンズなどのシステムは、後の機種とは異なるものだった。後につく基本的なシステムを形作ったという意味では、Nikon F-501AFがニコンではじめてのオートフォーカス一眼レフカメラということになる。

オートフォーカスの性能は、いまとなってはさすがに物足りなさを感じる。たぶん、なんとか実用的に使えるという程度に感じられるだろう。だが、マニュアルフォーカス用レンズでプログラムAEが使えることや、ファインダースクリーンが交換できることなど、AEカメラとしての完成度はじゅうぶんである。人によっては、シャッター速度ダイヤルというユーザインタフェースを好ましく思うこともあるだろう。

Nikon F-301は、Nikon F-501AFからオートフォーカスとファインダースクリーン交換機能を省略したような、マニュアルフォーカス専用の機種である。ただし、Nikon F-301のほうが、Nikon F-501AFより半年ほど早く発売されている。

ところで、Nikon F-301は電源として単4型乾電池4本、Nikon F-501AFは単3型乾電池4本を使用する。しかし、底蓋は相互に交換することができ、Nikon F-301を単3型乾電池4本で運用することで、電池の持続時間を長くすることも可能であった。それを気にするほど、電池の消耗が激しいわけではないが。

Nikon F-301とNikon F-501AFを除いた7機種が、「F三桁シリーズ」のもう1つのグループとなる。

このグループは、上級機であるF-801シリーズ、エントリーモデルであるF-401シリーズ、その間に位置するF-601シリーズの3つで構成される。



図1-45 ニコンF-301とニコンF-501AF

● F-401シリーズ ～オートフォーカスのエントリーモデル



図1-46 ニコンF-401シリーズ
手前より、F-401、F-401S、F-401Xである。

Nikon F-501AFにつづいて発売されたオートフォーカス一眼レフカメラは、1987年6月発売のNikon F-401である。1989年4月には、オートフォーカスのセンサが改良されたNikon F-401S、1991年9月にはさらに改良されたNikon F-401Xが発売された(図1-46)。

Nikon F-401では、それまでのニコンの一眼レフカメラにくらべて、大きな変化が試みられている。

パッと見てすぐにはわかるのは、ニコンの一眼レフカメラではじめてフラッシュが内蔵されたことである。フラッシュはポップアップするが、使用しないときでも発光部が隠れていない。フラッシュを内蔵していることを、アピールしたかったのであろうか。そのため通常であればファインダー部の前面に記される「Nikon」のロゴが、上面に記されることになっている(とくにNikon F-401ではそのロゴが、他機種にくらべてやや扁平なものになっている)。それを補うかのように、グリップ部には大きく「Nikon」のロゴが記されていることも、デザイン上の特徴といえる。

Nikon F-401では、Ai連動ピンとよばれる部品が省略された。これは、開放から何段階絞ったかの情報をレンズから受け取るもので、これが省略されたことによって、情報伝達が電気信号ではないマニュアルフォーカス用レンズを装着したときに、露出計が使えない仕様になった。また、オートフォーカス用レンズは絞りリングをつねに最小絞りに固定して使うこととなり、絞り値の選択は、ボディにあるダイヤルでおこなうようになっている。これらのことは、「レンズの互換性が無視された」としてマイナスイメージにはたらいしたが、最近の機種ではボディ側の2つのダイヤルでシャッター速度と絞りを選択するユーザインタフェースが定着しているので、Nikon F-401のユーザインタフェースはそれを先取りしたものといえる。また、このユーザインタフェースのために、最近の「Gタイプ」とよばれる絞りリングを省略したレンズも問題なく使うことができる。

このシリーズは3機種とも、単3型乾電池4本を電源として使用する。ボディが電池の入手が容易なのはあるがたいが、ボディが重くなるのでこのカメラが本来のターゲットとする初心者層からは、嫌われたことと思われる。

● F-801シリーズ ～A F時代を決定づけた上級機

Nikon F-401について、上級機であるNikon F-801が1988年6月に発売された。1991年3月には、動体予測フォーカス機能やスポット測光機能が追加された、Nikon F-801Sが発売された(図1-47)。

Nikon F-801は、はじめて1/8000秒のシャッター速度を使えるようにした35mm判一眼レフカメラである。Nikon F-801のスペックは、シャッター速度1/8000秒、フラッシュ同調速度1/250秒、5分割の評価測光、メガネをかけたままでも全視野が見えるファインダー、そしてオートフォーカスなど、それまでいろいろな機種で個別に実現されてきた機能の集大成のようなものであった。オートフォーカスの測距点が中央の1箇所しかないこと以外は、いまでもじゅうぶん通用する。

また、Nikon F-801には個人的な思い出も深い。私がさしよに自分専用の一眼レフカメラとして手にしたのは、Nikon FMだった。その後、カラーネガ、カラーポジ、モノクロフィルムあるいは低感度フィルムと高感度フィルムとを並行して使いたくなったので、ニコンのボディを増やすことにした。まずは家にあったNikomax FTを併用しはじめたが、シャッター速度ダイヤルがレンズマウント部にあるなど、少々使い勝手が悪い。そこで適当なものをさがしているうちに、Nikon F-801の購入に至った。Nikon F-801は私にとって、カメラが増殖していくという沼に足を踏み入れるきっかけとなった記念すべきカメラである^⑥。



図1-47 ニコンF-801とF-801S

⑥その後、Nikon Fをお迎えしたことで、沼から抜け出せない状況になったようだ。(「1998年の撮影日記」を参照)

● F-601シリーズ ～使いやすさと高性能の好バランス

Nikon F-601は、上級モデルNikon F-801とエントリーモデルNikon F-401の間に位置する機種として、1990年9月に発売された。シャッター速度が1/2000秒まで(フラッシュ同調速度は1/125秒)になっているなど、Nikon F-801よりはスペックが抑えられているが、Nikon F-801にはなかったスポット測光機能を搭載し、フラッシュを内蔵した。また、Nikon F-801ではオプションのマルチコントロールバックを使用することで可能だったオートブラケット撮影^⑦機能も用意されていた。

フラッシュが内蔵されていること、クォーツデイトモデルがあることなどの理由で、どちらかというと記念写真撮影用に使いやすそうなカメラとして入手した。実際に、使いやす

⑦露出をずらしながら何枚かつづけて撮影する機能。



図1-48 ニコンF-601
クォーツデートモデルとデートなしモデルが用意されている。



図1-49 ニコンF-601とF-601M

いカメラである。Nikon F-801とほぼ同じユーザーインターフェースで、より小ぶりになっている。フラッシュが内蔵されているのは、ほんとうに便利である(図1-48)。Nikon F-401のように、使用するレンズの制約もない。ただ、動作音が少々甲高くてたましいのが、難点である。

動作音については、気になる人が多かったのかもしれない。Nikon F-601の後継機にあたるNikon F70は、動作音が小さいことが大きな特徴になっていた。しかし、Nikon F70のユーザーインターフェースはほかの機種と大きく異なっており、併用しにくいものである。そのせいか、ニコンの一眼レフカメラのラインアップが「F三桁シリーズ」から「F二桁シリーズ」に移行しても、Nikon F-601は長くカタログに掲載されていた。

そして、Nikon F-601と同時期に発売されたのが、Nikon F-601Mである(図1-49)。

はじめにも書いたように、Nikon F-601Mは、Nikon F-601からオートフォーカス機能とフラッシュを割愛したものである。正面に書かれた文字「F-601」と「F-601M」でも判別できるが、ファインダー部にフラッシュがないこと、マウント部にオートフォーカスのカプラーや切り替えレバーがないことなどで、F-601ではなくF-601Mであると判別できる。

オートフォーカスの一眼レフカメラが主流になってきた時期に発売されたNikon F-601Mは、どのようなユーザー層をねらったものかは、よくわからない。ただ、日本国内での流通は目立たないものの、海外の市場ではよく見かけることができるらしいので、おもに輸出用になっていた可能性はある。

表1-1 ニコンF三桁シリーズ一覧

機種名	発売年月	おもな特徴
F-301	1985年10月	マニュアルフォーカス、MFレンズでもプログラムAE可
F-501AF	1986年04月	MFレンズでもプログラムAE可、ファインダースクリーン交換可
F-401	1987年06月	フラッシュ内蔵、MFレンズ使用時は露出計使用不可
F-801	1988年06月	最高速1/8000秒、フラッシュ同町1/250秒、ファインダースクリーン交換可
F-401S	1989年04月	フラッシュ内蔵、MFレンズ使用時は露出計使用不可
F-601	1990年09月	フラッシュ内蔵、リチウム電池使用
F-601M	1990年09月	マニュアルフォーカス、フラッシュ内蔵、リチウム電池使用
F-801S	1991年03月	最高速1/8000秒、フラッシュ同町1/250秒、ファインダースクリーン交換可
F-401X	1991年09月	フラッシュ内蔵、MFレンズ使用時は露出計使用不可

ともあれ「F三桁シリーズ」に含まれる、Nikon F-301, F-401, F-401S, F-401X, F-501, F-601, F-601M, F-801, F-801Sをコンプリートできた(図1-50)。世の中には、ニコンが発売したすべてのカメラをコンプリートしている人もあるようだから、「F三桁シリーズ」のコンプリートなどささやかな自己満足にすぎない。それでも、コンプリートは気持ちのよいものである♪

細かくは、クォーツデートモデルとデートなしモデルなど裏蓋のバリエーションや、輸出用にネーム違いのものもあるので、「F三桁シリーズ」のコンプリートはまだ完成していないともいえる。たとえば、Nikon F-601のアメリカ向けモデルは、Nikon N6006という名称になっていた(図1-51)。

Nikon F-601とNikon F-601Mのような、異なる機種についてはコンプリートできたが、1つの機種のなかのバリエーションについても、今後は完成させたい。たとえばNikon F-601には、クォーツデートモデル、デートなしモデル、輸出用N6006のほか、「後期型」とされるものがあつたはずだ。

ニコンの一眼レフカメラのラインアップが「F二桁シリーズ」に移行した後、新品のNikon F-601が安価に流通している時期があつた。そのNikon F-601は「Made in Japan」ではなく、「Made in Thailand」になっていたため、海外から日本に来たお客さんが買ってくれない、という話を店員さんから聞いたことがある。そしてMade in ThailandのNikon F-601はホットシューにフラッシュを固定するためのネジ穴があるので区別できる、と教えていただいた。ただ、いかさか昔のことであり、記憶に自信がない。最近、何台かのNikon F-601が手元にやってきたのだが、Made in ThailandのNikon F-601はまだ入手できていないので、確認ができていない。

なお、つぎはNikon F100をお迎えしようと考えている。そうすれば、「F二桁シリーズ」(Nikon F50, F60, F70, F80, F90, F90X, F100, U, Us, U2)もいちおうコンプリートとなる。ここでも細かいことにこだわれば、ブラック／シルバーのカラーバリエーション、裏蓋のバリエーション、Nikon F65のような輸出仕様モデルなどもある。また、b.Nikon!! (アパレルブランドagnes b.と共同企画で発売された、ブラックボディのNikon U)も、入手したくなるだろう。b.Nikon!!は限定発売モデルだったので、これを入手するのは少々難易度が高いかもしれない。



図1-50 コンプリートしたニコンF三桁シリーズは、小さなケースに整理した。



図1-51 ニコンF-601とN6006

チューリップといえば赤 マクロスライダーで水滴を覗きこむ そして立体視

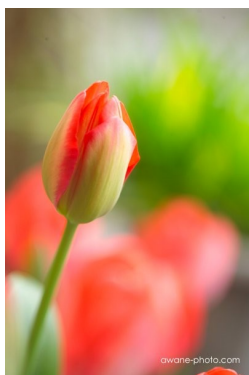


図4-24 緑色だったつぼみが、しだいに赤くなっていった。

Kodak DCS Pro 14n, AF Micro-NIKKOR 105mm F2.8S, TC-14AS



図4-25 上から見た表情も、色っぽい。

Kodak DCS Pro 14n, AF Micro-NIKKOR 105mm F2.8S, TC-14AS

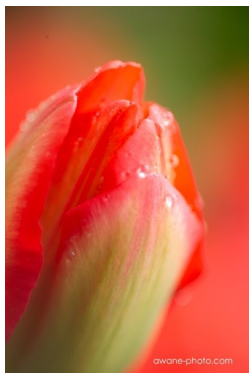


図4-26 後ろにある花が、グラデーションの背景になった。

Kodak DCS Pro 14n, AF Micro-NIKKOR 105mm F2.8S, TC-14AS

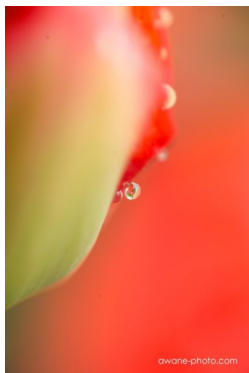


図4-27 水滴のなかに、後ろにある花が映りこんでいる。

Kodak DCS Pro 14n, AF Micro-NIKKOR 105mm F2.8S, TC-14AS

「♪咲いた、咲いた～」ではじまる童謡「チューリップ」では、花の色を「赤」「白」「黄色」と歌っている。チューリップの花には、さまざまな色のものがあり、さまざまな形をしたものもある。しかし、単に「チューリップ」といわれたときに連想するのは、赤い花のものではないだろうか。この秋におよそ100球を植えたが、黄色が1本だけ咲いたのを除き、いまのところ開花したものは赤いチューリップばかりである。

つぼみが小さいうちは、葉と同じ緑色をしているので、何色の花になるのかわからない。ところが、だんだんと色づいてくれば、やはり赤なのである。色づきはじめ、開花する直前のチューリップは、この「おちょぼ口」がとてもかわいらしい(図4-24)。上から見れば、口を軽く開けて、舌を少し出したような、色っぽい表情であることがわかる(図4-25)。

ワンパターンではあるが、今日も水をたっぷりとかけてから撮る。水がちょうどよい場所にとどまるようになるまで、何度でもかけなおす。こういうことができるのも、自宅に植えた花だからだ。AF Micro-NIKKOR 105mm F2.8SにテレコンバータTC-14ASを併用しているせいか、ほどよく描写が甘くなったように思える(図4-26)。

テレコンバータで焦点距離を伸ばしているから、後ろに並んで咲く花が、大きな赤いグラデーションの背景になってくれた。手前の、花の側面についた水滴に注目すれば、そのなかに後ろにある花の姿がちょうど写りこんでいることがわかる(図4-27)。

この水滴をもっと大きくして見たいので、リバースリングを使って拡大撮影してみよう。

一面まっ赤ななかに水滴があり、そのなかに花が咲いている、おもしろい絵ができた。水滴がちょうど、凸レンズと同じようなはたらきをしているのだ(図4-28)。

リバースリングでUW-NIKKOR 28mm F3.5を装着したとき、レンズのヘリコイドでピントをあわせることはできない。このようなときは、マクロスライダーといって、カメラ全体を前後または左右に微動させる装置を使って、構図を整えたりピントを調整したりする。

マクロスライダーでの平行移動を利用すれば、立体視用の写真をつくることも可能だ(図4-29)。

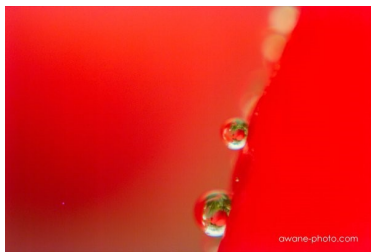


図4-28 赤一面のなかに水滴があり、そのなかに赤い花が咲いている。

Kodak DCS 460, UW-NIKKOR 28mm F3.5, BR-2



図4-29 並んだ花を立体視してみよう(平行法)。

Kodak DCS 460, UW-NIKKOR 28mm F3.5, BR-2

とまれ、自宅で植えた花だから、このようにいろいろな撮り方で遊べるのである。

それにしても、赤以外の花は、咲かないのだろうか？

2017年04月09日(日) 天気：晴のち曇 赤のほかにもチューリップ 色によって開花時期が違うのか？

昨年秋に、およそ100球のチューリップを植えた。今月になってから咲きははじめ、いま、赤いチューリップがたくさん咲いている。購入したチューリップの球根は、さまざまな「色や品種が混ざって」しまったというセットだったのだが、とにかく咲いたものは1つを除いて、一般的な姿の赤いものであった。だが、チューリップの開花はこれからがピークだ。昨日までは色がはっきりしなかったつぼみも、いろいろな色を示すようになってきた。